

「前の約束をふみにじって、そんなことをするのなら——」

と、旭硝子の製品をボイコットしてしまいました。そのため、その後しばらくは売り上げが大巾に落ちたといえます。

この噂は、竹中関係の人からも、旭硝子の人からも聞きました。だから、私は事実だと信じています。

後の噂が事実なら、前の噂も事実ということになりはしないでしょうか。

さて、話はモトにもどります。

施工業者指名のそんな噂をはらみながらも工事が始まりました。

当時はまだ、生コンやポンプが普及されていなくて、パッチャプラントでの現場打ちで、足場の上をカートを押して走り廻ったのを覚えています。

着くて、ビチビチ生きのいい土工たちが、上半身裸の汗まみれで、疾風のように駆け、吠え、そしてまた走りました。

「エンクリの松本」

「阪神間で一番」

を自慢にしていた若者たちです。

走り出すと加速がついて——そのために街道は、始め

から往きは下りの傾斜がついています——その人の実力以上のスピードが出るのです。

ウソのようですが、手ぶらで走るより、カードを押した方が早いのです。

また、一日中、こうして走り廻るには、体力だけでなく、気力も勢盛んでなければなりません。自然、気も荒くなり、目も血走ってきます。

若手の監督などが、カードの通り路を、うっかり歩いていたり、横切ったりすると、突き飛ばし、蹴り飛ばします。

それで文句を言わせません。

加速がついているから、途中でブレーキがききません。そんなことをすると、自分が転倒するか、後のカードに追突されます。

何せ、カーブを曲がる時には外側の車輪がグーンと上って、中のコンクリートがこぼれそうになるギリギリという、まるで曲芸みたいな危険さで走ります。

実際、このとき、カーブをきりそこねて足を骨折した仲間もいるくらいです。

街道近くで溶接工がガスを使ってたことがあります。

その火花が、頭の上に落ちてくるので、カード押しは土工が文句を言いました。

「ヘルメットをかぶらんから」

高い所から溶接工が、へらす口をたたきました。

もうそのころから、ヘルメットの着用はやかましくいわれていましたが、カード押しは誰もかぶりません。

何しろ、猛スピードで走るので、ヘルメットは横つちよにひんまがつたり、目の前にすり落ちたり、邪魔でなりません。

冬でも玉の汗をほとばしらせるカード押しに、ヘルメットは暑くてやり切れません。

——もし落ちて死んだら、監督官が来ないうちに、ヘルメットをかぶらせてくれ——

そんな冗談を言って、私たちは走り廻っていました。(落下事故のとき、ヘルメットをかぶっていないと、公傷の認定がむずかしくなるのです)

だから、溶接工のへらす口にも一理はありました。

しかし、気の立ったカード押しは、火の玉のようになっっているから、無理も道理もありません。

「何やて、もう一度言ってみろ」

「お前らばかり、仕事してるんとかやうわい」

「降りてこい、ポケッ」

上では答もなく、せせら笑って仕事をつづけています。また、一しきり、火花が散りかかりました。

「——」

土工は物も言わず、手近かなバタ角をつかみました。二間のバタ角がうなって、溶接工の足をかすめました。あたりはしななかったが、手にした溶接道具が落ちました。

「何さらしよるんじゃ」

溶接工が血相変えて降りてきました。

「何や、何や」

「いてまえッ」

双方の仲間が寄ってきて、あわや乱闘というところへ、監督が駆けつけました。

松本親方も、本田親父も飛んできました。

「上から火の粉が落ちてきては、仕事にならない。溶接をやめてくれ」

と親方が主張しました。

「いや、どちらも急ぐ仕事だから、仲良く同時進行でやってほしろ」

と監督がいました。

それから、溶接の親方もまじえて、談判になりましたが、双方言い分を改めないで、仲々決着しません。

「判った」

と親方が監督に言い、若い衆をふり返りました。







